

アンプシミュレーターの使い方①

シミュレーターの仕組みや構造

アンプシミュレーターとは？

アンプの構造や挙動をシミュレートした機材またはソフトウェア

アンプに繋いで発音する想定で開発されたエレキギターは、PA、ラインに接続してもギターらしいサウンドは出ない。そのため元来エレキギターの録音はアンプキャビネットの前にマイクを立てて録音するのが通例だった。

2000年代にLINE6社のPODというハード型の画期的なアンプシミュレーターが発売された。まるでマイク録りしたかのようなサウンドが簡単に得られ、ギターの録音方法に革命をもたらした。

現在はこれをソフトウェアで再現出来るようなものも多く、ハードウェアではより高額でリアルなモデルが人気を得ている。

アンプ～エフェクト、マイキング等、ギター録音に必要な一式の機能を有する。

ソフトウェア:IK Multimedia Amplitube、Native Instruments GuitarRig

ハードウェア:Kemper Profiling Amp、Line6 Helix

アンプシミュレーターのメリット

- **簡単に音作り、録音できる**
アナログではアンプのみならずマイクのチョイスや位置で大きく音が変わるのでセッティングは手間がかかる。シミュレータなら手間いらず。
- **プリセットを即座に呼び出せる**
アナログでは同じ音の再現は難しいが、シミュレータならプリセットを保存しておけば完全再現可能。
- **実機では不可能な組み合わせができる**
MarshallのヘッドにFender(しかもコンボタイプの)のキャビネットを繋ぐといった物理的に不可能なセッティングも可能。音作りは無限大。
- **サウンドが劣化しない**
実機ではエフェクターの数が増えれば音は確実に劣化してノイズも増えるがシミュレーターでは気にせず繋げられる。
- **財布に優しい**
多くのアンプやエフェクターを自由にルーティングできるだけ実機を揃えらるとなるとお金がいくらあっても足りない。シミュレーターなら経済的で財布にも優しい。

アンプシミュレーターのデメリット

- 音の線が細い、デジタル臭い
全てのデジタル機器に言えることだが、実機に比べると音の太さ、密度が足りずデジタル特有の硬くて淡白なサウンドになりがち。
- ピッキングニュアンスが出しにくい
実機(特にチューブアンプ)はピッキングの強弱による音色変化をつけやすい。これがシミュレーターでは実機に及ばない。
- ボリューム操作を反映しにくい
実機ではギター側のボリューム操作で歪みや音質のコントロールをしやすいがシミュレーターでは実機にニュアンスが及ばない。
- レイテンシーがある
あらゆるソフトウェアプラグインに言えるが、実際の演奏より僅かに出音が遅れるため演奏しにくい。

ただし、技術は日々進歩していてどんどんリアルになって来ている！